

### 多肢選択形式問題の場合

①問題文と選択肢の内容語をハイライト<sup>1</sup>させる。

Where is this conversation taking place?

- 答 (A) In an office  
(B) In an airplane  
(C) At a school office  
(D) On a train platform

② 授業でハイライトした内容語を見ながら、音声を聞かせて解答させる。

② 自宅でハイライトした内容語を見ながら、音声を聞いて解答してくる課題を出す。また、音声を聞いてディクテーションをしてくる課題も出す。聞く回数は5回まで(堀, 2008, p.129)。⇒ 反転授業<sup>2</sup>の勧め

③ 解答

④ 解説

- 解説を聞く学習者と、解説を必要としない学習者にわけて後者には自習をさせる<sup>3</sup>。
- 間違った学習者に音声のディクテーションをさせる。
- オーディオ・スクリプトを配布または Over Head Camera (書画カメラ)で提示する。

オーディオ・スクリプト-----

Man: What did you do with the customer records I gave you about an hour ago? They were on my desk earlier this morning.

Woman: Oh, I took them to the copy room and copied them. I put them back on your desk.

正答に必要な語である customer record が、聞き取れていたかどうかを尋ねる。

⇒ 聞き取れていなかった場合

#### Checkpoints

customer や record の両方の語とも、目で見たら意味や品詞がわかる単語であるのか?

→わかる(音素の識別段階でのつまづき)

原因：文字情報処理能力と音声情報処理能力の乖離

対処法：聞き取ることができなかった内容語をハイライトさせる。次に、ハイライトした内容語を見ながら音声を聞かせる。最後に、何も見ないで音声だけを聞かせる。

→目で見てもわからない単語があった。

原因：リスニング能力の問題ではなく、語彙力不足

対処法：品詞と意味を調べさせる。

⇒ 聞き取れていた場合(文法的区切れ、または話者の意図理解段階でのつまづき)

原因：背景的知識や推測力、論理的思考、文法的知識などが十分でない。

対処法：正答に必要な背景的知識や推測力、論理的思考、文法などを指導する。

<sup>1</sup> 内容語をハイライトさせるのをやめるひとつの基準：正答率が継続的に 80%を超えた時。自主申告に任せても構わない。

<sup>2</sup> 従来の授業形態を「反転」させたもので、自宅で映像・音声教材を用いて予習の形で学習し、学校の授業時間では学習内容に関わる意見交換などを行うもの

<sup>3</sup> 宿題、テスト勉強など。学習者の受講態度や学年などに応じてスマホとイヤホン、(電子)辞書の使用を許可する。